連載「巣づくりの住まい」vol.3

建築学科　准教授　石川恒夫

上毛　平成21年11月25日（水）

巣づくりの住まい ❸

石川 恒夫

蚕を守る知恵に学ぶ

自然光入れシンプルに

「バウビオロギー」は、初めて聞くと舌をかみそうで、直訳の「建築生物学」もピンとこないかもしれません。しかし、日本滞在の経験を持つドイツ人建築家はこぞって「日本の伝統民家こそ、バウビオロギーの模範だ」と言います。おそらく、それぞれの国の歴史に鍛えられた伝統的な住まいもそうなのでしょう。

かやぶき屋根や太い部材、存在感のある黒光りする柱、自然と交じり合った集落の景観など、民家の魅力はさまざまです。それらは住民の長い生活の中で淘汰（とうた）、洗練されたものでしょう。

一方で、現代において打ち捨てられていくものにはそれなりの理由があるのも事実です。防寒に対しては全く無防備で、そこかしこにすき間があることは、それは昨今の省エネ対策に逆行する点です。魅力の一つである土壁やかやぶきも、保守・維持は大変です。

群馬県は養蚕・絹業が栄えた地域で、養蚕農家の住まいは蚕の飼育方法に応じて変化を遂げてきました。蚕から繭への成長を促すために、室内では夏でも炭火をたき、除湿する方法があることを知ったときは、なるほどと思いました。

明治初期に養蚕指導に大きな役割を演じた高山長五郎の蚕の育成法「清温育」によれば、建物には五つのポイントがあります。

第一に「土地高燥」にして排水の良いこと。湿度の高い場所は避けるという土地選びです。第二に蚕室は南に面すること。太陽の光を導き、炭火を使わなくても済むようにすることです。第三に南北両面に廊下を設けること。気候変化に対する緩衝領域を配置することです。第四に奥行きを浅くすること。これによって自然光を部屋の奥まで取り入れることができます。第五に構造や設備を窮屈にしないこと。空間をシンプルにし、空気の流れを妨げないことを意味しています。

自然の力を利用しながら蚕を守る手だてですが、人の住まいとしても大切なことばかりです。わたしたちは今まで以上に自分の国の伝統技術に学び、現代の技術と融合しつつ、先人の知恵を継承していくべきだとあらためて思います。

（前橋工科大学大学院准教授・石川恒夫）

明治期に建てられた高山長五郎の生家。換気のための屋根上の3つのやぐらなど蚕の生育に適した造りが見られる＝藤岡市